

書評

北風 政史 編

心不全の診かた・考えかた

東京大学大学院教授・循環器内科

永井良三

心不全は人類にとって重要な疾患である。いかなる疾患であれ、最終的な死因に心不全が必ず関与する。心不全は病名ではなく全身性の症候群である。単一の検査によって診断することは不可能であり、症状、身体所見、様々な検査所見を総合して診断する必要がある。また、概念も収縮障害、拡張障害、右心不全、左心不全など多様な視点から定義される。さらに心不全を来す基礎疾患が多彩である。それだけに臨床医にとって心不全症例を的確に診断し対処することは必ずしも容易でない。

心不全の病態生理は分子、細胞、器官、個体レベルで研究されており、その研究は長い歴史を持っている。その成果は疾患概念の進歩とともに、新たな診断・治療法に還元されている。かつての心不全の標準治療も現在では禁忌

とされたり、逆に禁忌とされた治療が標準治療となっていたりする。これも病態研究の進歩によるものであるが、初学者には心不全に対する敷居の高さを生んでいる。

このような状況を考えると、今回の北風政史先生の編著による『心不全の診かた・考えかた』はユニークな解説書であり、時宜を得たものである。概念や病態生理論は基本的事項にとどめ、現場における実践的視点から心不全を理解してもらおうという意図が感じられる。全体は16章からなり、ほとんどの章は現場の視点およびアプローチに従って、どのように考え行動すべきかが記述されている。また現場の対応だけでなく、実験室における研究や大規模臨床研究の進め方まで紹介されており、内容は多岐にわたる。さらに

現時点での知識だけでなく、心不全に対する考え方の過去、現在、未来についても紹介されていることは、これからの研究テーマの探索に有用である。

心不全は分子から個体レベルで理解する必要がある、さらに疫学までを見渡せる広範な知識が求められる。しかしながら心不全に関する情報は膨大であり概念の変化も早い。心不全に関する学術体系をすべてマスターしてから実地に臨むことはほとんど不可能である。むしろプロの視点をなぞることによって心不全を理解するほうが現実的である。本書は静止座標系ではなく、運動する座標系から心不全を見ている。展開する光景は従来のテキストとは異なるもので、このようなトレーニングを積むことによって次第に心不全の概念を構築し、次の課題を認識することができる。現場で心不全患者の診療に取り組んでおられる臨床医にぜひ推薦したい。

〔B5 頁288 2007年 定価
6,825円(本体6,500円+税5%) 医学書院刊〕